

地域包括ケアシステムにおける多職種連携について



よこくら よしたけ
横倉 義武

公益社団法人 日本医師会 会長

団塊の世代が75歳以上となる2025年に向けて、国民が住み慣れた地域で質の高い医療・介護を受けられるため、「かかりつけ医」を中心として、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、ケアマネジャーなど多職種が密に連携し「切れ目のない医療・介護」を提供できるよう地域包括ケアシステムを構築していくことが重要である。

我が国では、フリーアクセスによる外来へのアクセスの良さが病気の早期発見、早期治療に寄与している。まずは「かかりつけ医」を受診することで、適切な受療行動、重複受診の是正、薬の重複投与の防止等により医療費の適正化も期待できる。

「かかりつけ医」が持つ機能には「患者中心の医療」、「継続性を重視した医療」、「チーム医療、多職種連携」、「社会的な保健・医療・介護・福祉活動」、「地域の特性に応じた医療」、「在宅医療」の実践があり、日本医師会では、地域住民から信頼される「かかりつけ医機能」を維持・向上するため、「かかりつけ医機能研修制度」を実施している。あわせて、地域包括ケアシステムの中で「かかりつけ医」を中心とした「まちづくり」を推進している。「かかりつけ医」となる地域に根ざした医療機関があることは、その地域の魅力に直結し、子育て世代の都市部への流出や過疎化を防ぐことにもつながり、ひいては我が国の国土を守ることになる。超高齢社会において、被災地の要配慮者の生命・健康や地域社会を守るためには、地域包括ケアによる「まちづくり」が最大の災害対策であり、国土の強靱化(レジリエンス)と言える。

国民の幸福の原点は健康である。病に苦しむ人がいれば、何としても助けたいというのが医療人の願いであり、患者のみならず医療関係者の全てが望んでいる。

未曾有の少子高齢社会を乗り切るためには、個々の努力だけでは不可能である。我々医師会としても、郡市区医師会を中心として、市町村行政との連携、多職種連携、健(検)診、予防活動、看護職の養成など、「かかりつけ医」を中心とした地域包括ケアシステムの推進において主体的な役割を担っていかねばならないと考えている。また、在宅医療はその中心的な役割を果たすものであり、住民が安心して在宅医療を受けられるためにも、行政職を含め医療・介護に携わる多職種が「顔が見える関係」を築き、お互いに連携して進めていきたい。

.....

略歴

昭和44年 3月	久留米大学医学部卒業	平成18年 5月	福岡県医師会会長
昭和44年 4月	久留米大学医学部第2外科助手	平成22年4月1日	日本医師会副会長
昭和52年 8月	久留米大学 医学博士号取得	平成24年4月1日	日本医師会会長 (至現在)
昭和52年10月	西ドイツ ミュンスター大学教育病院 デトモルト病院外科	平成25年 4月	久留米大学医学部 客員教授 (至現在)
昭和55年 1月	久留米大学医学部講師	平成28年10月	世界医師会 次期会長 (至現在)
平成 2年 4月	医療法人弘恵会ヨコクラ病院院長		
平成 2年 4月	福岡県医師会理事		